

# 日常的な学び

## —「学内子育て支援センターぴっぴ」との連携

東京都市大学人間科学部 教授

小川清美 (おがわ きよみ)

Profile — 小川清美

お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻（児童学修士）。2009年より現職。日本保育学会副会長，全国保育士養成協議会副会長。専門は児童学，幼児教育学。著書は『子どもに伝えたい伝承あそび』（萌文書林），『「あたりまえ」が難しい時代の子育て支援』（共著，フレーベル館）など。



### 学内子育て支援施設の成立

現・東京都市大学の前身の一つである東横学園女子短期大学に保育学科が新設された2004年に、「学内子育て支援センターぴっぴ」（通称「ぴっぴ」）も同時に開設された。この施設は保育学科新設のための特色でもあった。実際に地域の親子が遊ぶ場所として開設したものである。保育者養成をする学科にとって、乳幼児との触れ合いがないまま大学生になっている学生に、実際の赤ちゃんや幼児、そして親を知る機会を与える施設として開設した。それから10年が経過した。東横学園女子短大は同法人の武蔵工業大学と統合し、大学名が東京都市大学と代わり、保育学科は東京都市大学人間科学部児童学科として平成21年から出発した。学内子育て施設である

「ぴっぴ」は地域の親子の「ひろば」として、これまで約2万世帯以上の家族に利用され、総利用者数は22万5千人を超えている。行政からの金銭的な補助は受けず、大学が運営している施設であるので、利用の条件はない。大学がある世田谷区だけではなく、近隣の大田区や目黒区、さらに川崎市などに住む親子が利用している。利用料金は1家族（何人でも）1日200円である。月曜日から金曜日までは午前10時から午後4時まで、土曜日は午前10時から午後1時までである。利用料金は保険料や親のインスタントコーヒーや紅茶代となる。大学の入学式などの行事の際は閉館となる。また大学の授業がない8月は夏休みである。専任の保育者が日々3名常駐し、親子への必要な支援

や学生指導の一端を担っている。

### 『子育て支援演習』について

「ぴっぴ」における子育て支援を学ぶ実習は、現在『子育て支援演習』という科目名で行っている。大学2年生から4年生にかけての3年間という変則的な学修である。単位は2単位である。各学年とも、期のはじめには講義方式で授業の説明や目標を説明し、「ぴっぴ」での実習は、説明を受けた後に自分が入れる時間に行く。また期の終わりには再び講義方式の授業で、自らの記録をもとにグループ討論をし、考察をする。4年生のまとめのレポートとして、自分の理想の「ひろば」をデザインさせている。卒業生の8割は、子どもとかかわる幼稚園や保育所、こども園などに就職している。保育者になってかかわる相手は子どもだけではなく、保護者であることは言うまでもない。保護者との信頼関係を築くことが保育に携わる際、たいへん重要である。通常、教育実習や保育実習では、子どもとかかわることが中心であり、保護者とかかわることはほとんど許されていない。朝と帰りのあいさつ程度では、保護者の気持ちなどを理解することは困難である。現在の教育実習や保育実習には、保護者とかかわる学びは含まれていない。

ところが、実際に保育者になっ



写真 「学内子育て支援センターぴっぴ」

た際に新米の保育者が戸惑うのは、保護者とのかかわりである。保護者にどのように保育者としての考えを伝えればいいのかなどのことを学習することなく、保育という現場に立たなければならないのが実情である。つまり、現在、保育者になろうとする学生たちは、たとえば『家庭支援論』の科目を履修して、支援の方法を机上で学ぶことはできても、支援の実験を体験することなく保育現場に出て行かなければならない。本学児童学科では、この支援の実験を体験できる場として「学内子育て支援センターびっぴ」がある。

### 「学内子育て支援センターびっぴ」での学生の実習のあり方

「学内に親子が遊んでいる部屋があるから、いつでも、都合のいい時に、気軽にその部屋に行くことができる」と思う人がいたとしたら、たいへんな誤解である。大学が学生の授業のために、言い換えれば学生の学習のために用意した施設であるので、利用者の親子にとってもプラスの働きがなければならない。つまり、保育者が本格的な「支援」を行っていることが必要なのである。その「支援」とは何か。「学内子育て支援センターびっぴ」で大切にしているのは次の事項である。

- ① ゆっくりと、くつろげる場の環境構成をする（場所・人・もの）。
- ② 「親子の遊び場」としての利用を支える。
- ③ 利用者の主体的な活動を支える。
- ④ 異年齢で出会い、交流することを大切にする。
- ⑤ 地域社会とのネットワーク作りと再生に寄与する。

すなわち、親子の「支援」とは親が安心して子育てができるように支えることであるという基本に立ち、揺るがないことである。これらの理念を実践しているのが、

「びっぴ」の保育者たちである。

『子育て支援演習』の科目で「びっぴ」に実習に入る。入り方のルールは以下である。

- ① 予約する。入れない事情が生じた際は、実習指導室か「びっぴ」に連絡する。
- ② 同時に入ることができる学生は2名まで。
- ③ 記録用のノートは持ち込まない。
- ④ 60分間、室内にいてテーマを行う。60分間が経過したら隣室（実習指導室）で「びっぴノート」に30分間は記録し、所定の位置に提出する。
- ⑤ 子どもを預かったり、親の相談に答えることはしないで、保育者に伝える。
- ⑥ 利用者の親子に対しては、自分たちの学習に協力していただいているという気持ちを忘れない。
- ⑦ 個人情報を守る。

各学年の実習のテーマは次のようである。

**[2年生前期]** 親子を観察する。

**[2年生後期]** 保護者と話をする。

**[3年生前期]** 打ち解けて保護者と話をする。

**[3年生後期]** フロアと保育者席から観察する。

**[4年生前期]** 保育者の隣で業務を手伝いながら観察する。

**[4年生後期]** 自分で決めたテーマで行う。

2年生前期は、実習は1回と限っている。これは、担当教員が記録の添削指導をするからである。2年生後期からは、テーマに沿った実習をした後は何度でも「びっぴ」に入れる。

### 「びっぴ」実習の意義

「びっぴ」における「子育て支援」の実習では、次のような意義が考えられる。

- さまざまな家族を温かく受け入れる姿勢を学ぶ。
- さまざまな子どもの個性、成長のプロセスに触れる。
- 少し上の世代がする現代の子育てのたいへんさに理解を深める。

● 親子の交流の様子を見る。

● 保育者たちの連携の様子、地域のネットワークとの協働の様子について知る。

これらの意義が、学生自身によって理解されていると学生の記録から読むことができる。まずは、学生たちのほとんどがたいへん緊張して「びっぴ」に入る。親子の観察をする目的で「びっぴ」に入る学生は、部屋のどこで観察をするのかを決めるまでには時間を必要とする。親子は「びっぴ」の室内のさまざまな場所で遊んでいる。子どもの年齢によって、その様子は全く異なる。3歳の子どもたちが2、3人いると、活動は活発で動きが激しい。はいはいをするくらいの子どもが多い時には、親の近くで子どもがゆったりと過ごしている。同じ状況はほとんどなく、学生が予約をして入る日や時間によって現れる様相はいろいろなのだ。そこで、学生自身がどこに身を置くのかを自分自身で考え、決定する。親子の様子をしっかり見ることができ、かつ親子の邪魔をしない場所を探すのはなかなかたいへんである。

保護者と話をするというテーマでは、どの保護者が話す相手になってくださるのか、子どもの様子を見ながら、子どもとかかわっていき、保護者につながるという方法を考えるまで時間がかかる学生がいる。話す保護者を決めたら、さっと一直線にその保護者に近づいて話し始める学生もいる。ほとんどの保護者は進んで学生と話をしてくださる。保育者になる勉強をしている学生という認識が保護者にはあり、かかわってくださっている。

このように「びっぴ」の利用者のお蔭で、学生は子育て支援実習の意義を理解していくことができる。